投稿

中学生における喫煙と大麻など違法薬物に関する意識調査

舘（タチ） 英津子（エツコ）＊1　磯村（イソムラ） 毅（タケシ）＊2　渡辺（ワタナベ） 愛（アイ）＊1＊3　加藤（カトウ） 裕子（ユウコ）＊4

目的　大麻はタバコと同様に煙の吸引により使用するため，喫煙の常習化からの進展が想定できる。今回，中学生を対象として喫煙と大麻など違法薬物に関する意識調査を行ったので報告する。

方法　愛知県内の２つ，および鹿児島県内の１つの公立中学の１～３年生の生徒　1,144名に，喫煙行動および大麻など違法薬物に関する無記名の自記式意識調査を実施した。1,024人より回答が得られ，そのうち意識調査部分のすべてが無回答，および調査の承諾を得られなかった８名を除く1,016名を有効回答として解析した。

結果　大麻などを手に入れるのは「簡単だと思う」または「何とか手に入ると思う」と回答した人（大麻などの入手可能群）は，１年，２年，３年の順に，76.0%，72.4%，76.8%であった。常習的喫煙の経験者（現喫煙者＋前喫煙者）は順に，3.4%，1.9%，3.2%であった。常習的喫煙経験者とその経験のない人（非喫煙者＋試し喫煙者）を比較すると，周囲に大麻などを所持または使用した人がいると回答した人は前者では24.1%で，後者の3.7%と比較して高かった（$p<0.01$）。大麻などをすすめられたことがあると回答した人は前者では13.3%で，後者の0.3%と比較して高かった（$p<0.01$）。大麻などを手に入れるのは「不可能」と回答した人のうち，大麻には中毒になる危険はない，もしくは大麻には犯罪に巻き込まれる危険がないと答えた人は，それぞれ12.7%，14.0%で，大麻などの入手可能群の3.1%，3.2%と比較して高かった（$p<0.01$）。

考察　対象とした中学では，多くの生徒が中学１年の段階から大麻などを入手しようと思えばできると考えていることがわかった。入手できないと回答した人は，入手できると回答した人に比べ大麻の危険性の認識が乏しい人が多く，現状に対する関心の低さと認識の甘さが懸念された。今後は，入手しようと思えばできるが，大麻をはじめとした薬物を，自分の意志で，主体的に，拒否していく態度を養うことを目指していく必要がある。また，多くの薬物のゲートウェイドラッグとなるタバコを吸わないという防煙教育を徹底することが大切と思われた。

キーワード　喫煙，大麻，違法薬物，ゲートウェイドラッグ，中学生

Ⅰ　は　じ　め　に

平成７年ごろからの覚せい剤乱用による検挙者数の大幅な増加，特に高校生を中心とした若年層の乱用の増加をうけ，平成10年から「薬物乱用防止五か年戦略」（平成10年５月，薬物対策推進本部）が開始された。平成20年からは３度目となる「第３次薬物乱用防止五か年戦略」（平成20年８月，薬物対策推進本部）が進められている[1)]。その一方で近年では若者をター

＊１予防医療研究所研究員　＊２同代表　＊３福岡県立大学大学院看護学研究科
＊４鹿児島希望が丘学園スクールカウンセラー

ゲットとした「ハーブ」「お香」と呼ばれる脱法ドラッグが次々と出現している。

違法薬物乱用防止のためには，青年期の若者における違法薬物への意識や違法薬物との接点について理解することが大切である。勝野らが2009年に行った全国の全日制高校生を対象とする薬物乱用の実態調査[2]によると，わが国の18歳時の大麻生涯経験率は0.5％であり，欧米諸国と比較して極めて低い。たとえば2010年の米国の調査では19～20歳の大麻の１年使用率は30.6％に及んでいる[3]。しかし，わが国でも2006年の定点調査では一部の定時制高校で8.6％というこれまで以上に高い乱用経験率の報告があり[4]，事態は切迫してきていると考えられる。また，大麻など違法薬物の入手可能性は大学生，定時制高校生では過半数を超える報告がある[5)6]。特に大麻はタバコと同様に煙を吸うことから，ゲートウェイドラッグとしての喫煙を想定しうる[6)7]が，若年者における喫煙と大麻の関係については未だ不明な点が多い。今回，中学生を対象として大麻など違法薬物に関する意識調査を実施する機会を得たので報告する。

Ⅱ 方　　法

（１） 調査対象と調査時期

対象は愛知県内都市部にあるＡ中学校の１～３年生（在籍者704人）とＢ中学校の１年生（在籍者162人），鹿児島県都市部にあるＣ中学１年（在籍数278人）の合計1,144人で，2011年６月（Ａ中学），11月（Ｂ中学），2012年３月（Ｃ中学）に調査を行った。対象校はいずれも公立中学である。

（２） 調査方法と調査内容

Ａ中学，Ｂ中学については，学外講師として喫煙・薬物防止教育の講義の依頼を受けた際，講義の準備として数週間前に調査票を配布し講義前に回収した。Ｃ中学についても学外講師として喫煙防止教育の講義の依頼を受けた際，講義前に調査票を配布・回収した。調査内容は大麻など違法薬物に関する意識と喫煙状態である（**表１**）。

大麻の危険性には，急性の中毒と慢性の依存症がある。これを分けて尋ねるのがのぞましいが，回答上の負担および対象が中学生であるので，日常用語としてなじみのある中毒という言葉を用いた。

入手の可能性，周囲の所持・使用者の有無，すすめられた経験，および使用経験の項目では，大麻および種々の違法・脱法ドラッグ（通称「ハーブ」「お香」など）を念頭におき「大麻など」とした。

（３） 分析方法

大麻など違法薬物に関する意識については対象属性別に集計，χ^2検定を行った。また，喫煙状態別などの項目別比較にはクロス集計後χ^2検定を行った。

統計処理にはIBM SPSS Statistics Ver.19を使用し，有意水準は$p<0.05$とした。

（４） 倫理的配慮

調査対象者には研究目的，調査内容，調査の回答は任意であること，調査票を提出しないことで不利益になることはないこと，無記名で記入することを口頭で説明した。さらに，文書で調査協力の承諾を得た。

表１　大麻など違法薬物に関する意識調査

以下の設問についてあなたに一番近いものを選んでください。
・大麻には中毒になる危険が　ａ．あると思う　ｂ．ないと思う
・大麻には犯罪に巻き込まれる危険が　ａ．あると思う　ｂ．ないと思う
・大麻などを手に入れるのは　ａ．簡単だと思う　ｂ．何とか手に入ると思う
　ｃ．不可能と思う
・周囲に大麻などを所持または使用した人が　ａ．いる　ｂ．いない
・大麻などをすすめられたことが　ａ．ある　ｂ．ない
・大麻などを使用したことが　ａ．何度かある　ｂ．１回だけある　ｃ．ない
・タバコを　ａ．吸う　ｂ．以前吸っていた　ｃ．試しに吸ったことがある
　ｄ．１本も吸ったことはない
性別　男　　女　　年齢　　才

Ⅲ 結　　果

（１） 対象者の概要（表２）

対象とした中学３校のうちＡ中学の在籍者は，１年生216人，２年生240人，３年生248人の合計704人で，計643人（回収率91.3％）から回答を得た。Ｂ中学は，１年生の在籍者162人のうち143人（回収率88.3％）から回答を得た。Ｃ中学１年生の在籍者278人のうち230人（回収率82.7％）から回答を得た。３校あわせて1,016人を解析対象とした。以後特別に断りなき場合，３校あわせて分析した。

1） 大麻の危険性の認識

大麻には中毒になる危険が「あると思う」と回答した人は，１年生，２年生，３年生，全体（以下，１～３年生，全体）の順に，それぞれ，95.4％，94.0％，93.7％，94.7％であった。また，大麻には，犯罪に巻き込まれる危険性が「あると思う」と回答した人は，同じく順に，95.5％，92.7％，92.8％，94.3％であった。性別，学年，学校による差はみられなかった。

2） 大麻などの入手の可能性

「大麻などを入手することが可能と思うか」について，「不可能と思う」と回答した人は，１～３年生，全体の順に，それぞれ，24.1％，27.5％，23.2％，24.6％であった。「何とか手に入ると思う」と回答した人は，同じく順に，46.0％，44.0％，53.6％，47.2％，「簡単だと思う」では，同じく順に，30.0％，28.4％，23.2％，28.1％であった。

「何とか手に入ると思う」と「簡単だと思う」と回答した人をまとめて，入手可能群とすると，１～３年生，全体の順に，76.0％（Ａ中学：74.0％，Ｂ中学：80.0％，Ｃ中学75.1％），72.4％，76.8％，75.3％であった。学年，学校による差はみられなかったが，性別では男子の入手可能群71.6％に対し，女子の入手可能群は79.0％で，女子のほうが有意に高かった（$p < 0.01$）。

表２　対象者の概要

	在籍者数（人）	有効回答（人）	男子（人）	女子（人）	性別無回答	有効回答率（％）
全体	1 144	1 016	494	506	16	88.8
Ａ中学１年	216	200	104	94	2	92.6
Ａ中学２年	240	220	112	107	1	91.7
Ａ中学３年	248	223	117	97	9	89.9
Ｂ中学１年	162	143	62	77	4	88.3
Ｃ中学１年	278	230	99	131	－	82.7

3） 周囲の大麻など所持・使用者の有無（大麻の近接状況）

「周囲に大麻などを所持または使用した人がいるか」について，「いる」と回答した人は，１～３年生，全体の順に，それぞれ，4.6％，3.2％，5.0％，4.4％であった。性別，学年，学校による差はみられなかった。

4） 大麻などをすすめられた経験の有無

「大麻などをすすめられたことがあるか」という質問に，「ある」と回答した人は，１～３年生，全体の順に，それぞれ，0.9％，0.5％，0.5％，0.7％であった。Ｂ中学で「ある」と回答した人はいなかったが，Ａ中学の１年生３人，２年生１人，３年生１人，およびＣ中学１年生２人が「ある」と回答した。

5） 大麻などの使用経験の有無

「大麻などを使用したことがあるか」という質問に，Ａ中学１年生１人，Ｃ中学１年生２人（全体の0.3％）が「ある」と回答した。この３人はいずれも現喫煙者で，性別は，女子２名，性別無回答が１名であった。

6） 喫煙状態

現在の喫煙状態について，「１本も吸ったことはない」（非喫煙）と回答した人は，１～３年生，全体の順に，それぞれ，91.4％，92.7％，92.7％，92.0％であった。「試しに吸ったことがある」（試し喫煙）と回答した人は，同じく順に，5.2％，5.5％，4.1％，5.0％，「以前吸っていた」（前喫煙）と回答した人は，同じく順に，2.7％，1.4％，2.3％，2.3％，「現在吸っている」（現喫煙）と回答した人は，同じく順に，0.7％，0.5％，0.9％，0.7％であった。性別，学年，学校による差はみられなかった（表３）。

（２） 大麻などの入手可能性の認識別の比較（表４）

1） 大麻の中毒の危険性，および犯罪に巻き込まれる危険性の認識

「大麻には中毒になる危険性はないと思う」と回答したのは，入手可能群では回答のあった727人中23人（3.1％），入手不可能群では回答のあった214人中31人（12.7％）と，入手可能群のほうが有意に中毒になる危険性を認識している割合が高かった（$p<0.01$：χ^2検定）。

また，「大麻には犯罪に巻き込まれる危険がないと思う」と回答したのは，入手可能群では回答のあった728人中24人（3.2％），入手不可能群では回答のあった209人中34人（14.0％）で，入手可能群のほうが，有意に大麻により犯罪に巻き込まれる危険性を認識している割合が高かった（$p<0.01$：χ^2検定）。

2） 大麻などの近接状況

「大麻などを周囲に所持・使用者がいる」と回答したのは，入手可能群では回答のあった750人中39人（5.2％），入手不可能群では回答のあった244人中５人（2.0％）と，入手可能群のほうが有意に周囲に所持・使用者がいると回答した人が多かった（$p<0.05$：χ^2検定）。

表３　学校・学年別喫煙状態（有効回答数）

（単位　人，（　）内％）

	総数	現喫煙	前喫煙	試し喫煙	非喫煙
全体	997(100)	7(0.7)	23(2.3)	50(5.0)	917(92.0)
中学１年全体	558(100)	4(0.7)	15(2.7)	29(5.2)	510(91.4)
Ａ中学１年	197(100)	1(0.5)	2(1.0)	10(5.1)	184(93.4)
Ｂ中学１年	138(100)	-(　-)	3(2.2)	8(5.8)	127(92.0)
Ｃ中学１年	223(100)	3(1.3)	10(4.5)	11(4.9)	199(89.2)
Ａ中学２年	220(100)	1(0.5)	3(1.4)	12(5.5)	204(92.7)
Ａ中学３年	219(100)	2(0.9)	5(2.3)	9(4.1)	203(92.7)

表４　大麻などの入手可能性の認識別の比較

（単位　人，（　）内％）

	可能（何とか＋簡単に）入手（n＝752）		不可能（n＝245）		χ^2検定
	人数	有効回答数	人数	有効回答数	
中毒になる危険性は「ない」と回答	23(3.1)	727	31(12.7)	214	**
犯罪に巻き込まれる危険性は「ない」〃	24(3.2)	728	34(14.0)	209	**
周囲に所持または使用者が「いる」〃	39(5.2)	750	5(2.0)	244	*
大麻などをすすめられたことが「ある」〃	7(0.9)	752	-(　-)	245	
大麻などを使用したことが「何度かある」〃	3(0.4)	752	-(　-)	245	

注　*$p<0.05$，**$p<0.01$

表５　大麻などの近接状況別の比較

（単位　人，（　）内％）

	周囲の大麻などの所持／使用者の有無				χ^2検定
	いる（n＝44）		いない（n＝953）		
	人数	有効回答数	人数	有効回答数	
中毒になる危険性は「ない」と回答	2(4.5)	44	51(5.4)	950	
犯罪に巻き込まれる危険性は「ない」〃	4(9.3)	43	53(5.6)	951	
大麻などを入手することは「（何とか＋簡単に）可能である」〃	39(88.6)	44	708(74.8)	947	*
大麻などをすすめられたことが「ある」〃	6(13.6)	44	1(0.0)	953	**
大麻などを使用したことが「何度かある」〃	3(6.8)	44	-(　-)	953	**

注　*$p<0.05$，**$p<0.01$

（３） 大麻などの近接状況別の比較（表５）

1） 大麻の中毒の危険性，および犯罪に巻き込まれる危険性の認識

周囲に所持・使用者が「いる」と回答した人のうち「大麻には中毒になる危険性はないと思う」と回答したのは，44人中２人（4.5％），周囲に「いない」と回答した人は回答のあった950人中51人（5.4％）であった。また，「大麻には犯罪に巻き込まれる危険がないと思う」と回答したのは，周囲に「いる」と答えた人で回答のあった43人中４人（9.3％），「いない」と回答した人では回答のあった951人 中53人（5.6％）であった。大麻の近接状況による大麻の危険性の認識に差はなかった。

2） 大麻などの入手の可能性の認識

周囲に所持・使用者が「いる」と答えた人のうち「大麻などを入手できると思うか」について「何とか入手できると思う」と回答したのは44人中15人（34.1％），「簡単に入手できると思う」と回答した

のは44人中24人（54.5％）であった。周囲に「いない」と答えた人では「何とか入手できると思う」と回答したのは回答のあった947人中454人（47.9％），「簡単に入手できると思う」と回答したのは947人中254人（26.8％）であった。

「何とかできる」または「簡単にできる」と回答した人をまとめて，大麻などの入手の可能性を認めた人（入手可能）として分析すると，周囲に「いる」と答えた人のうち44人中39人（88.6％）が入手可能と回答し，周囲に「いない」と回答した人の回答のあった947人中708人（74.8％）と比較して，有意に入手可能と考えていた（$p<0.05$：χ^2検定）。

3）　大麻などをすすめられた経験の有無および使用経験の有無

周囲に所持・使用者が「いる」と回答した人の中で大麻などをすすめられたことがある人は44人中６人（13.6％），いないと回答した人の中では回答のあった953人中１人（0.1％）であった。周囲に所持・使用者が「いる」と回答した人のほうが，有意に多く大麻などをすすめられた経験が「ある」と回答した（$p<0.01$：フィッシャー補正χ^2検定）。

周囲に所持・使用者が「いる」と回答した人の中で大麻などを使用したことある人は44人中３人（6.8％），「いない」と回答した人の中では953人中０人（0.0％）であった。周囲に所持・使用者が「いる」と回答した人のほうが，有意に多く大麻などの使用経験が「ある」と回答した（$p<0.01$：フィッシャー補正χ^2検定）。

（４）　喫煙状態別の比較（表６）

1）　大麻の危険性の認識

「大麻には中毒になる危険性はないと思う」と回答したのは，非喫煙＋試し喫煙群では回答のあった962人中51人（5.3％），前喫煙＋現喫煙群では30人中２人（6.7％）であった。また，「大麻には犯罪に巻き込まれる危険がないと思う」と回答したのは，非喫煙＋試し喫煙群では回答のあった962人中54人（5.6％），前喫煙＋現喫煙群では30人中３人（10.0％）であり，喫煙状態による危険性の認識に差はなかった。

2）　大麻などの入手可能性の認識

「大麻などを入手できると思うか」については，非喫煙＋試し喫煙群では960人中回答のあった724人（75.4％）が「何とか／簡単に入手できると思う」，前喫煙＋現喫煙群では回答のあった29人中22人（75.9％）が「何とか／簡単に入手できると思う」と回答した。喫煙状態による大麻入手の可能性の認識に差はなかった。

3）　大麻などの近接状況

「周囲に大麻などを所持または使用した人がいるか」という質問に対しては，非喫煙＋試し喫煙群では回答のあった963人中36人（3.7％）が「いる」と回答，前喫煙＋現喫煙群では回答のあった29人中７人（24.1％）が「いる」と回答し，常習的喫煙経験のある人のほうが周囲に大麻使用者がいる割合が高かった（$p<0.01$：イエーツ補正χ^2検定）。

4）　大麻などをすすめられた経験の有無および使用経験の有無

「大麻などをすすめられたことがあるか」については，非喫煙＋試し喫煙群では965人中３人(0.3%)，前喫煙＋現喫煙群では30人中４人（13.3％）と，常習的喫煙経験のある人のほうが有意に多く大麻をすすめられた経験があった（$p<0.01$

表６　喫煙状態別の比較

（単位　人，（　）内％）

	非喫煙＋試し喫煙（n＝965）		前喫煙＋現喫煙（n＝30）		χ^2検定
	人数	有効回答数	人数	有効回答数	
中毒になる危険性は「ない」と回答	51(5.3)	962	2(6.7)	30	
犯罪に巻き込まれる危険性は「ない」〃	54(5.6)	962	3(10.0)	30	
大麻などを入手することは「(何とか＋簡単に）可能である」〃	724(75.0)	960	22(75.9)	29	
周囲に所持または使用者が「いる」〃	36(3.7)	963	7(24.1)	29	**
大麻などをすすめられたことが「ある」〃	3(0.3)	965	4(13.3)	30	**
大麻などを使用したことが「何度かある」〃	-(　-)	965	3(10.0)	30	**

注　**$p<0.01$

：フィッシャー補正χ^2検定)。

「大麻などを使用したことがあるか」については，非喫煙＋試し喫煙群では965人中０人（0.0％），前喫煙＋現喫煙群では30人中３人（10.0％）と，常習的喫煙経験のある人のほうが有意に多く大麻などの使用経験があった（$p<0.01$：フィッシャー補正χ^2検定)。

（５） クラス別大麻などの近接状況

クラス別のデータが得られたＡ中学の１年生と３年生について，大麻の近接状況をクラス別に**表７**に示す（このクラス名は便宜上使用した名称であり，実際のＡ中学のクラス名とは全く関係ない)。

周囲に大麻を所持または使用している人が「いる」と回答した人数および無回答はクラスによってばらつきがあり，両方とも０人のクラスが各学年ともある一方，「いる」と回答した人が４～５人存在するクラスもあった。

表７　クラス別　大麻などの近接状況

	周囲に所持・使用した人が「いる」と回答（無回答）	すすめられたことが「ある」と回答（無回答）
学年－組[1]		
1-1	3(-)	-(-)
1-2	-(-)	-(-)
1-3	1(-)	1(-)
1-4	3(1)	-(1)
1-5	-(-)	-(-)
1-6	-(1)	1(-)
1-7	4(2)	-(2)
3-1	1(-)	-(-)
3-2	1(-)	-(-)
3-3	-(-)	-(-)
3-4	5(-)	-(-)
3-5	-(-)	-(-)
3-6	3(-)	1(-)
3-7	1(3)	-(1)

注　クラス名は便宜上名付けたものであり実際のクラス名とは無関係

Ⅳ 考　　察

（１） 大麻などの入手可能性の認識の実態

今回の調査のきっかけは，磯村による定時制高校生における喫煙と違法薬物に関する意識調査である[6]。この報告は常習的喫煙経験者（喫煙者・前喫煙者）の94％，非喫煙者の48％が大麻などの違法薬物を手に入れることが「簡単」，もしくは「何とか可能」と回答していることを示し，喫煙が違法薬物のゲートウェイとなっている可能性を示唆している。しかし，ゲートウェイの議論以前に，定時制高校生の約６割が大麻などを入手可能と回答したとする結果は，定時制高校という限られた教育現場での結果ではあるものの，他の教育機関，とくに高校に入学する前の中学校での状況を危惧させるものであった。

今回対象となった中学校での状況をみると，大麻などを入手可能と回答した人は，学校・学年を問わず７割を超えており，少なくとも今回対象とした中学生の多くは１年生の段階から違法薬物にアクセス可能と自らを認識していると考えられた。

2010年10月に実施された中学生に対する全国調査[8]では，「大麻の入手」について「絶対不可能」「ほとんど不可能」「少々苦労するが手に入る」「簡単に手に入る」の４段階で聞いており，うち，「少々苦労するが手に入る」は10.0％，「簡単に手に入る」4.7％（男女差なし）と「手に入る」と答えた生徒は15％程度であった。一方，大麻の経験率，喫煙率についてみると全国調査[8]では大麻経験率0.3％，喫煙経験率6.9％と今回の結果と大きな差はみられなかった。

今回の調査では「大麻など」としたので直接の比較は困難であるが，入手可能性の認識が高かったのはインターネットを含むメディアによる情報や薬物の流通状況の変化による中学生への影響があるとも考えられた。しかし，Ａ中学とＢ中学での調査実施時期は，2011年６月および11月であり，一連の新聞，テレビによる「脱法ハーブ」報道の先駆けとなった2011年11月26日の中日新聞等の新聞による記事以前である。今後はなぜ入手可能と考えたのか，どのような入手手段を想定しているか，について調べる必要がある。

（２） 生涯喫煙率と大麻などの近接状況との関連

喫煙率をみると，対象者全体の生涯喫煙経験率は8.0％程度であり，学年別にもほとんど変

化はみられなかった。すなわち，中学入学後極めて早い時期，もしくは小学校の段階で，試しにタバコに手を出した子どもが大部分で，中学校になってから手を出す子どもは少ないことが示唆された。例えば学年別の比較が可能なＡ中学でみると，常習的喫煙経験者（前喫煙者＋現喫煙者）の生涯喫煙経験者（前喫煙者＋現喫煙者＋試し喫煙者）に対する割合は，１年生で23.1％（３人／13人），２年生で同じく25.0％（４人／16人）であったものが，３年生では43.8％（７人／16人）と増加傾向にある。これは，試し喫煙を繰り返すうちに，常習化していく状況が反映されている可能性が考えられる。

今回の調査では，この常習的喫煙経験者の大麻など違法薬物の近接状況が示された。現喫煙者の２人に１人，常習的喫煙経験者でも４人に１人が大麻などの所持または使用者と接点があり，現喫煙者の42.9％（３人／７人）が大麻の経験があると回答した。この結果は，先の定時制高校での結果と一致しており，タバコが，特に常習的喫煙の経験が違法薬物のゲートウェイとなっていると考えられた。これは現在の中学生にとってタバコが合法的な嗜好品というよりもむしろ大麻などの違法薬物に近い存在であることを示唆しているのかも知れない。あるいは，中学生の生涯喫煙率が7.0％と低値を取る中で，あえてタバコに手を出す人は，かつて中学生の生涯喫煙率がより高かったころの喫煙経験のある中学生とは性格を異にしているのかも知れない。いずれにせよ，大人の側がかつての感覚で，「少しのタバコくらい」と安易に考えていると，実際にはそうした子どもの数人に１人は，既に大麻などとの接点を持っているという可能性を見落とすことになる。そして，少なくともこの状況は愛知と鹿児島のいずれにおいても中学１年から今回の調査で認められた。

（３） 無関心層の存在とその危険性

今回の調査でさらに注目したいのは，入手可能性別にみた，生徒の危険性の認識の違いである。すなわち入手可能群では，ほとんどの中学生（約97％）が大麻の危険性を認識していたのに対し，入手不可能群では，中毒の危険性も，犯罪に巻き込まれる危険性についても「ない」と回答した人が約12～14％認められた。この結果は，磯村の定時制高校の調査[6]とも一致している。定時制高校では，調査対象の３割を占める，非喫煙で入手不可能と答えた人の６割がいずれの危険性も「ない」と回答していた。

この入手不可能と回答した人の危険性認識の乏しさが何に由来するのか，今回の調査より考察することは困難であるが，可能性を探ってみたい。

今回の調査では入手可能と回答した人の方が約７割と多数を占め，かつそのほとんどは大麻の危険性を認識していた。これをそのまま受け取れば，通常の感覚を持つ中学生であればこのような認識を持つのが現在の中学生の置かれている環境である可能性が高い。すなわち彼らは，彼らなりに（場合によっては大人以上に）種々のメディアからの情報も含め，現在の社会状況を主体的・能動的に把握して，その上で「自分もその気になれば，入手しようと思えばできる」という意味で入手可能と回答していた可能性がある。そうであれば彼らが高い危険性の認識を持っていたこともうなずける。つまり，入手可能と答えた人はある種の社会に対する関心と判断力を持った人たちであり，むしろより支援が必要なのは入手不可能と答えた人かも知れない。主体的に状況を認識できず受身的で，薬物の問題にも無関心である可能性があるからである。

また，今回の調査では，周囲に大麻などを所持または使用した人が「いる」と回答した人はクラスごとにばらつきがあることがわかった。多いクラスでは１クラスに４～５人おり，クラスの人数の１割を超えている。このような状態になれば，上記の受身的かつ無関心な生徒が，配属されたクラスという全くの偶然によって大麻などの話題に出会うことも十分考え得る。そして，その場の雰囲気次第では「知ったかぶり」をしたり，「いきがって見せたり」するという若者心理が働き「大麻などたいしたことない，危険ではない」という売る側の意図的な

誤った情報や，携帯・端末等の経由を含む不確かなネット情報をそのまま受身的に取り込む危険が危惧されるのである。

しかも所持または使用しているという知人なり友人は，いわゆる中学生が想像するような目つきや言動が怪しい薬物使用者のイメージとは全く異なり，ごく普通の生活をしているように見える。実際，今回の調査で大麻などの近接状況と大麻の危険性の認識に関連はなかった。こうなると短絡的・表面的な外見のみで危険性を低く見積もり，抵抗感が減り，さらに大麻などに近づくということも考えられる。第三次薬物乱用防止五か年戦略を受けた文部科学省の取り組みの中でも，青少年が危険行動に至るステップとして，無知，無関係であると考えている層（無関心層）が，ふと関心・興味を持ったときに行動に至るとされている[9]。

（４） 今回の調査から考える追加すべき薬物予防対策

今回，調査対象とした中学校では，中学生でも大麻を入手しようと思えばできると多くの生徒が考えていることがわかった。つまり今後は，入手しようと思えばできるが，大麻をはじめとした薬物を，自分の意志で，主体的に，拒否していく態度を養うことを目指していく必要がある。特に無関心層を放置することなく積極的に正確な薬物教育を行うことが挙げられる。

次に，多くの薬物の入り口であるゲートウェイドラッグであるタバコ，このゲートをしっかり閉じてしまうことである。特に，中学１年の時から少数ながら存在している喫煙中学生たちは，彼ら自身の問題のみならず，周囲への影響，波及効果という意味で非常に憂慮される。彼らに対してもあきらめずにタバコを吸わない・常習化させない・タバコをやめるという喫煙防止教育を徹底することが大切と思われる。

そして，最後に親世代にタバコがゲートウェイドラッグであり，薬物の第一歩であることを周知させ，子の喫煙に対し関心を持つように呼びかける必要があろう。現在の中学生たちにとってのタバコは，親たちの想像以上に大麻などの薬物使用に極めて近い存在にある可能性があるからである。

今回の調査では，２県，３中学という限られた対象者であるので，さらに調査・検討を深めていきたい。

文　　献

1）内閣府共生社会政策：第三次薬物乱用防止五か年戦略（http://www8.cao.go.jp/souki/drug/sanzi5-senryaku.html）2012.9.7.

2）勝野眞吾，吉本佐雅子，三好美浩，他．高校生の喫煙，飲酒，薬物乱用の実態と生活習慣に関する全国調査JSPAD報告書2009.

3）Johnston LD, O'Malley PM, Bachman JG, et al. Monitoring the Future national survey results on drug use, 1975-2010. Volume Ⅱ: College students and adults ages 19-50 Ann Arbor: Institute for Social Research, The University of Michigan NIH Publication 2011；98：312.

4）嶋根卓也，和田清．定時制高校生における飲酒・喫煙・薬物乱用の実態について．日本アルコール・薬物医学会雑誌2007；42（3）：152-64.

5）楠見晴重，井上琢智，八田英二，他．関西四大学「薬物に関する意識調査」集計結果 報告書 2011年10月　関西大学・関西学院大学・同志社大学・立命館大学，8,（http://www.ritsumei.jp/topics_pdf/admin_f009a4bdcac792afbd431e37ce8b9856_1322468104_.pdf）2012.2.12.

6）磯村毅．定時制高校生における大麻など違法薬物に関する意識調査．厚生の指標2012；59（3）：20-4.

7）和田清．中学生における薬物乱用－gateway drugの観点から－．小児科2006；47（9）：1405-11.

8）和田清，小堀栄子，嶋根卓也，他．飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2010年）．平成22年度厚生労働省研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）分担研究報告書2010；1-66.

9）文部科学省．青少年による薬物乱用に対する文部科学省の取組－第三次薬物乱用防止五か年戦略－（http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/documents/kitagaki_siryo.pdf）2012.2.10.